

# 外国人学生と日本人学生による短期協働プログラム における学びと友人関係の構築に関する事例報告

— SSIP2018 に参加した外国人学生に関する調査 —

西川 寿美・山崎 真伸

## 1. はじめに

近年、日本の多くの大学、自治体、日本語学校等で、海外の大学の夏季休暇期間を利用して、外国人学生を対象に短期プログラムを実施している。その中で、昭和女子大学（以下「本学」）では、2013年からSWU Summer International Program（略称SSIP）と銘打った3週間の短期プログラムを毎年実施している。

本プログラムでは、「外国人学生」と「日本人学生」<sup>1</sup>がともに学び、協働して一つのプロジェクトを遂行する。文化的背景の違う他者と関係を構築し、一つの目標に向かって協力し合うプロセスの中で、学生たちは多くのことを学ぶ。そのような外国人学生と日本人学生の混合グループによる学びが、本プログラムの大きな特徴の一つであるが、実際に学生たちは本プログラムからどのような学びを得ているのだろうか。

このことを明らかにするために、2018年度の本プログラム（「SSIP2018」）参加者を対象として、外国人学生、日本人学生それぞれへのインタビュー調査を行った。本稿では、第一報として、外国人学生に関する調査結果について報告する。

## 2. SSIP の概要

SSIPは、本学が2012年度にグローバル人材育成推進事業<sup>2</sup>に採択されたことにより、2013年度に始まったプログラムである。海外協定大学学生と本学学生が共に学ぶ「多文化協働」の場を提供することを趣旨として企画された。概要は以下の通りである。

### 2-1 プログラム開催時期・期間・場所

前期6月下旬から7月上旬の3週間に本学および本学の関連施設（東明学林）<sup>3</sup>を用いて実施している。SSIP2018は2018年6月19日から7月9日まで実施した。

### 2-2 参加学生

参加学生数は年によって異なるが、外国人学生15名前後、本学の学部学生40名前後（聴講生を除く）からなる。外国人学生は、協定大学内で選抜された代表学生ならびに外部企業等の支援を受けて本学が招待する学生で、北米出身者とその他地域（主にアジア）の人数のバランスを考慮して募集している。参加者は外国人学生も含めて全員が女性である。SSIP2018では、外国人学生13名、日本人学生延べ46名が参加した。外国人学生は全員が同じ宿泊施設で3週間を過ごす。

### 2-3 プログラム内容

本プログラムは以下の2科目からなる。

① **Japan Studies** 現代日本文化、伝統的日本文化、日本社会に関する理解を深めることを目的と

した科目である。本学専任教員および外部専門家によるオムニバス講義とそれに関連した体験活動を組み合わせて実施することを目指している。使用言語は英語であり、例外として日本語で講義する場合は英語の通訳をつける。外国人学生は原則全日程に参加し、レポートを提出することで2単位を取得する。日本人学生は事前講義1回に参加し、期間中7回の講義あるいは活動に参加し報告書を提出することで1単位を取得する。

内容は年によって異なるが、SSIP2018では以下の内容を扱った(表1)。

表1 SSIP2018 Japan Studies 概要

Lecture Topics	Experiences / Activities
Japanese Film	Film viewing (Tokyo Story)
Japanese Pop Culture	Ghibli Museum
Business Project	Article writing for Locobee MAG
Religious Views	Asakusa Sightseeing
Design	Sightseeing
Bento	Bento Cooking
Calligraphy	Calligraphy class
Tea Ceremony	Tea Ceremony
Kabuki	Kabuki Performance at National Theatre
Yukata	Yukata Experience
Lecture on Paris Convention and Global Environmental Problems	
Lecture on Japanese Women	
Lecture on North Korea, China, US – A Japanese View	

② **Cross-cultural Workshop** 学外の専門家に科目担当を依頼している。外国人学生と日本人学生がグループになり、一つのテーマについて協働して課題に取り組み、その成果を発表する。この過程において参加学生は、言語や文化等の背景の違いを超えて相互理解を深めることの難しさと意義を体験することになる。全90分15回の活動(講義・ワークショップ・グループ作業・発表)を全て英語で行う。最終段階に東明学林で二泊三日の宿泊研修を行い、寝食を共にしながらグループで課題に取り組む。扱うトピックは年によって異なり、SSIP2018では「広告分析」をテーマとした。外国人学生も日本人学生も全活動への参加とジャーナルおよび最終プレゼンテーションにより2単位を取得する。

#### 2-4 運営体制

Japan Studies, Cross-cultural Workshop いずれの科目についても本プログラム担当の1名の専任教員がコーディネータとしてプログラム企画から実施、成績評価までを受け持っている。運営の実務については、本学教学支援センター国際交流課職員が担当する。

本学では毎年6月から7月にかけて米国ハーバード大学ライシャワーセンターからの学生をインターン生として受け入れているが、SSIP開始時より現在まで、このインターン生が国際交流課職員の指導のもとプログラムの準備および運営に大きく貢献している。2016年からは、米国の協定大学への留学から帰国した本学学生もインターンに加わり、ハーバード大学生と共にプログラムの準備・実施に携わっている。SSIP2018には、ハーバード大学生2名、本学学生2名がインターンとして参加した。

### 3. 海外留学の学びに関する先行研究

海外留学の学びについては多くの先行研究がある<sup>4</sup>。一般に、海外の大学でのアカデミックな（学問的な）学びについては成績や単位によって、語学留学の場合は外国語運用能力に関する検定試験の成績によって、留学の学習効果を一定程度確認することができる。これらアカデミックな学習成果は言うまでもなく、それ以外にも異文化での生活を通しての学びや人間的成長などの非アカデミックな効果もまた重要であるとして、近年の研究ではアカデミックな学びと非アカデミックな学びを総合的に捉える見方が主流となってきた<sup>5</sup>。

これらの総合的な学びについてはさまざまな分類が行われている。例えば足立（2010）は、アカデミックな学びの領域である「学問・学術的学び」「外国語運用能力の獲得」と並んで、非アカデミックな留学の成果・効果として「異文化適応能力の獲得」「人間的成長」を挙げており、一見ランダムに見える留学の成果や効果に枠組みを与えることで教育的価値が明確になるとしている。また、米国の留学機関である IES Abroad でも、海外留学を通じて「認知的成長」「対人関係における成長」「個人の内面的成長」が得られるとして、それぞれの能力を分類している（IES Abroad 2011）。さらに Deardoff（2006）は、米国内の大学で行われた多くの海外留学プログラムに関する調査結果をもとに、海外留学で習得される異文化適応能力についてモデル化した。このモデルは図1のように、ピラミッド型の階層構造であり、まず①**態度： Attitudes**（他者への敬意、判断を保留し他者・他文化に対してオープンであること、曖昧さに対する寛容さ、好奇心）に関する学びが基底にあり、次いで②**知識： Knowledge**（文化的自意識、文化全般に対する理解と知識、固有文化に関する情報、社会言語的気づき）と、③**スキル： Skills**（傾聴、観察、解釈のためのスキル、分析、評価、関連づけのためのスキル）が同時並行

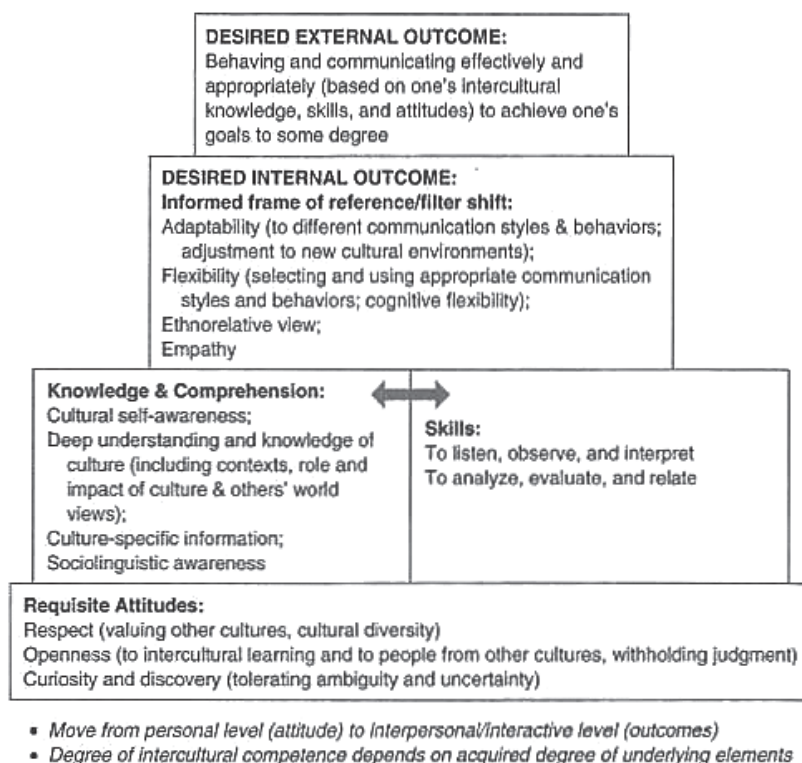


図1. Deardoff の異文化適応能力獲得のピラミッドモデル

出典：Deardoff（2006）p.254

的に習得され、最終的には内面的、外面的な異文化適応能力が獲得されるとしている。

このような留学の成果・効果に関して、短期留学と比較して長期留学の方が効果的であると考えられがちであるが、最近の研究によれば留学期間の影響は限定的であり、短期留学であっても教育効果は高いとの見解が示されている<sup>6</sup>。短期留学については厳密な定義はないが、一般的に3か月未満のものを指すことが多く、近年は世界的な傾向としてこのようなタイプの留学が増えており<sup>7</sup>，それに伴い短期留学の効果に関する研究も増えてきている。例えば秋庭（2012）は、Deardoff（2006）の異文化適応能力モデルを参考に、短期海外留学で得られる能力を「国境をまたぐ能力」としたうえで、「態度」「知識」「スキル」に分類し、オーストラリアでの語学プログラムの成果を記述している。

一方、このような学びの成果に注目した研究とは別に、学びを得るためのプロセスに注目した研究も見られる。工藤（2011）は、短期海外研修プログラムの成果を「原因」（研修への参加）と「結果」（研修の効果）という一元的な因果関係ではなく、「複雑な多数の要素からなる動的な過程（プロセス）としてとらえること」の重要性を指摘したうえで、新たな教育効果モデルを提案している。

以上、海外留学で得られる学びに関する先行研究を概観した。

本稿では、SSIP2018に参加した外国人学生を対象に行ったインタビュー調査結果をDeardoff（2006）の異文化適応能力モデルおよびそのモデルをもとに秋庭（2012）が用いた手法・観点を参考に分析し、参加した学生がどのような学びを得たのか、学生同士の友人関係の構築がどのように学びに影響したのかについて考察する。

## 4. 調査

### 4-1 調査目的

本調査の目的は以下の通りである。

- ①本プログラムを通じて外国人学生にどのような学びが得られたか、「態度」「知識」「スキル」の観点から明らかにする。
- ②参加者同士でどのような友人関係が構築されたか、またそのことが外国人学生の学びにどのように影響を与えたかを分析する。

### 4-2 調査方法

本調査では、SSIP2018に参加した外国人学生13名のうち7名に対して、半構造化インタビューを実施した<sup>8</sup>。調査対象者はできるだけ異なる国籍、異なる出身大学から選んだ。調査対象者の国籍、学年、これまでの海外経験などの属性は表2の通りである。

表2 本調査におけるインタビュー対象者7名の属性

学生	出身	学年	海外経験の有無
A	北米	3年	日本への旅行経験あり。
B	東アジア	修士1年	なし
C	北米	1年	なし
D	東南アジア	1年	タイ、ベトナムなどへの旅行経験あり。一人で海外に出るのは初めて。
E	東南アジア	4年	米国生まれで幼少期に母国に戻る。大学の研修で東南アジアを中心に複数回渡航経験あり。日本は初めて。
F	北中米	2年	中米生まれで幼少期に米国に移住。高校で南米などを数回訪問した。両親とはクレオール語で会話する。
G	東南アジア	3年	なし

インタビューは、3週間のプログラム終了前後の時期（7月6日、7月7日、7月9日）に実施した。1回のインタビューの所用時間は45分から60分で、使用言語は英語である。各学生に対しては、本調査の趣旨・目的を説明し、調査に応じることは任意であり途中辞退も可能であることを伝え、インタビューを記録することと個人情報の取り扱いについて口頭で同意を取ったうえで調査を開始した。インタビューは、山崎が担当し、記録協力者として国際交流課の職員1名が同席した。

本調査では逐語的な記録は不要と判断し、全てのインタビュー終了後、録音内容と記録メモを照合しながら回答の要約を日本語で記録し、最終記録を整えた。分析過程において重要と考えられる箇所については元の英語による回答に立ち返り、その部分の逐語的な確認を行った。次に、この最終記録を対象に事例-コード・マトリクス的手法に則り<sup>9</sup>、共通する項目をもとにコード化およびカテゴリー分類を行った上で、「4-1 調査目的」で示した2つの観点から分析した<sup>10</sup>。

## 5. 分析結果

### 5-1 SSIP2018 を通じて得られた学び

本プログラムを通じてどのような学びが得られたのか、外国人学生たちの回答を集計した。具体的な学びについて、Deardoff (2006) および秋庭 (2012) を参考に、以下の通り3つの種類に分けて分析する。

- ①「**態度**」: 好奇心や他者への敬意といった前向きな気持ちをもつこと、新しい体験を通して自信、積極性、柔軟性などを習得することを指す。学びの内容としては、積極的な姿勢をもち、世界観を拡げることができたかどうかなど、内省的な観点から把握する。
- ②「**知識**」: 本プログラムにおいては、とくに日本の文化や社会に関する知識の深まりを指す<sup>11</sup>。授業を通じて得られたアカデミックな学びと、滞在中の体験や日本人とのコミュニケーションを通じた観察などの非アカデミックな学びの両方があると考えられる。
- ③「**スキル**」: 文化的背景の異なる他者とコミュニケーションする力、異文化を解釈し理解しようとする力を指す。

このうち、③に関しては、とくに異文化の中での確かにコミュニケーションできる力の獲得において、どのような「困難」があったのか（あるいはなかったのか）、またコミュニケーションを通じてどのような「気づき」があったのか、2つに分けて集計した。

#### 5-1-1 「態度」に関する学びや気づき

初めに、本プログラムによって自分自身の「態度」にどのような変化があったのか、あるいはどのような気づきや学びがあったのか、回答を見る。Deardoff (2006) のモデルでは「態度」の学びが基底となってその上に「知識」と「スキル」の学びが重ねられることから、「態度」の学びが深まることによってその他の学びも深化していくことを予想した。

プログラムを通じて自分の中でポジティブな変化があったと回答した学生は7名中6名であった。主なコメントを紹介する。学生EとFの2名はもともと海外経験が豊富な学生であるが、本プログラムにおいても内省的な気づきがあったとして、ポジティブな変化について語っている。

- ・自分の中でとても精神的になった。日本人学生がみんなハッピーで楽しそうにしているのを見て、自分

もいい影響を受けていると思う。(学生 E)

・とてもいい環境(日本、学校、プログラム)だった。ここにいることで幸せな気持ちになれた。海外で、違うもの、違う人たち、違う世界を見るたびに、世界は素晴らしいと思う。アメリカではそれほど広い世界は見られない。(学生 F)

学生 D, G は、海外経験がまったくないかもしくは乏しい学生であるが、日本という異文化の中で大勢の日本人と共に学ぶ経験を通じて、自分の将来に向けて強く刺激を受けたようである。

・将来は、日本の大学院に進んで日本で働きたいと思っている。SSIP に参加して、その思いが強くなった。(学生 D)

・母国での授業は本を読むことばかりで退屈に思うこともよくあったが、SSIP は毎日学校に来て新しいことを学ぶのがとても楽しかった。このプログラムによって日本語を勉強したいと思うようになった。もう一度日本に戻ってきたい。(学生 G)

学生 C も、学生 D, G と同様に初めての海外経験だったが、家族と長時間離れるのも初めてであり、外国で知らない人たちの中で過ごすことも初めてであるため、参加前は不安と期待が入り混じっていたと述べている。それでも日本での滞在は刺激的だったようで、まったく新しい世界を知ることができたと語っている。

・日本は想像していた以上にクレイジーで面白い。ホームステイで体験したお風呂やドライバー、車が(本国とは)逆の車線を走っていることなど、びっくりした。電車で迷ったのも楽しい。東京では、自分が特殊な存在であり周りからも違って見られる。自分がマジョリティでない立場、自分が違う自分になったみたいでとても面白い。(学生 C)

一方で、学生 A の場合は、日本への渡航経験もあり日本人の友達をつくりたいという期待をもって本プログラムに参加したが、自分自身の納得する形での目標が達成できなかったようである。この学生は自分自身をシャイだと感じており、今度は別のプログラムで目標を達成したいと考えている。

・それほど自分の中での変化は感じていない。自分はシャイなので、あまり友達をつくるのがうまくない。でも、アメリカでは昭和ボストンのフレンドシップの活動<sup>12</sup>に参加して友達をつくりたい。(学生 A)

### 5-1-2 「知識」に関する学びや気づき

7名中6名の学生から、Japan Studies で提供するさまざまな講義やアクティビティを通して日本の文化や社会に関する知識が深まったとの回答があった。本プログラムの参加目的としても、学生 C 以外<sup>13</sup>、全員が日本文化や社会を学びたいという意欲をもっており、Japan Studies はこのような学生の期待に応えたものであったといえる。

具体的に新たな知識が得られた場面として、4名の学生が「デザイン」「茶道」「書道」「宗教」「弁当づくり」「国際関係」など個別の授業を挙げたが、このうち2名の学生は複数の授業を通じてそこに共通する日本文化の特徴が学べたと述べている。

・SSIP を通じて日本人の考え方を学んだ。茶道、デザインなどは、礼儀、簡潔、余白を残す価値観が共通している。文化の背後の価値観を学べたことがよかった。(学生 E)

・茶道、宗教、デザインなどさまざまな講義があり、それらを通じて背景にある歴史がなぜ重要なのか理解することができた。例えば宗教がデザインに影響を与えていることなどは興味深かった。(学生 F)

Japan Studies は上述したように、オムニバス形式による講義とそれに関連したアクティビティで構成されている。一つ一つのテーマは独立しているものの、多角的な視点から総合的に日本に対する理解を深めるというコンセプトをもっており、これらの学生のコメントからは狙い通りの効果があったことがうかがえる。一方で、このような多角的な視点からの学びの性質上、各テーマの講義時間は限られたものとなり、すでに日本について一定の知識があって個別テーマについてさらに深く学びたい学生にとってはやや物足りない面もあったようだ(学生 A, 学生 D)。

また講義やアクティビティ以外でも、自らの体験や日本人とのコミュニケーションなど、授業以外の場面で日本について学んだと回答する学生もあった(学生 C, D)。本プログラムでは、毎日3コマ～4コマ(1コマ=90分)の授業時間以外は基本的に拘束時間はなく、また休日も3週間の間に3日間設けられている。学生は、授業が終わった後の時間や休日などを利用して、思い思いに東京の街を散策するほか、一泊二日のホームステイ体験では、日本人家庭の中で日常的な日本を体験する。このような教室内での学び以外のいわばインフォーマルな時間を利用して、学生たちはいろいろな体験をしながら日本の文化や社会に対してさまざまな発見をしているようである。

学生 D は母国でも将来的に日本のような交通システムが導入されることを期待していると語っており、またその際には日本人のマナーをぜひ参考にしたいと話している。

・東京の電車・地下鉄は母国にないもので、利用するのが難しかったが、これによって渋滞を防げるのでぜひ母国でも導入できるといいと思う。また歩道やエスカレータの歩き方など、マナーを参考にしたい。ほかに、渋谷で迷ったときにバス停まで案内してくれる人がいるなど、優しい日本人が多くいた。(学生 D)

学生は、インフォーマルな時間を利用して、友人との交流を深めたり、興味のある場所に一人で出かけたりするなど多様な経験をしている。学生の過ごし方はさまざまであるが、いずれも新たな学びや気づきにつながる可能性があり、インフォーマルな時間が重要であることがうかがえる。

### 5-1-3 「スキル」に関する学びや気づき

上述の通り、この項目については異文化の中でコミュニケーションする力の獲得において感じた「困難」と、コミュニケーションを通じて得られた「気づき」の2つの項目に細分化して集計した。

本プログラムに参加する外国人学生は、所属大学を通じてではあるが基本的には個人単位で参加しており、出身国・出身大学が多様である。一方で、日本人学生は全員が本学の学生であり、人数的にも外国人学生よりも多い。グループメンバーは日本人学生、アジア系の非英語ネイティブの外国人学生が多く、英語ネイティブの学生はグループの中で少数派になる。このため、使用言語が英語であるにもかかわらず、英語ネイティブの学生がコミュニケーションに支障を感じる場面も見られた。

3名の英語ネイティブの学生(学生 A, C, F)からは、このような立場に戸惑いを感じる声もあった(学生 C)一方で、日本人学生や他の非英語ネイティブ学生とのコミュニケーションにとくに問題を感じない学生も見られた(学生 A, F)。

・「困難」: Cross-cultural Workshop のグループでは、自分以外はみんな日本語が話せるので、自分がお荷物になっているようで、このことに少しストレスを感じた。

「気づき」：英語がネイティブでない学生には、繰り返し説明しなければならないこともあるが、それはアメリカ人同士でもあること。自分がオープンマインドでいることが大事。(学生C)

・「困難」：とくになし

「気づき」：わかりにくい時もあったがストレスには感じなかった。日本人学生は表情や動きもうまい。自分はブロークンな英語に慣れているから、できるだけ簡単な言葉を使うことでスムーズに話げできた。コミュニケーションは言語だけではないと思う。(学生F)

一方、4名の非英語ネイティブの学生は、全員が日本人学生とのコミュニケーションに関して言語的な問題はあまり気にならないとしているが、英語ネイティブの学生とのコミュニケーションについてはやや難しさを感じる学生もいた(学生B, G)。言語面以外では、日本人学生とのコミュニケーションの中で、コミュニケーションスタイルの違いについて戸惑いを見せる学生もいた(学生E)。しかし、この学生の場合も、最初の戸惑いを超えて新たな気づきや自信を得たようである。

・「困難」：日本人はアイデアがあるのになかなか言わないので、はじめはみんな授業に興味がないのかと思って戸惑ったが、だんだんとそれが日本人のコミュニケーションスタイルだとわかって、自分が受け入れる方がよいと思った。日本人はシャイで自分からイニシアチブを取らないことが多いが、これは日本人のコミュニケーションスタイルだと思う。

「気づき」：誰でもその人特有の考え方や接し方がある。自分はほかの人に対して支配的な態度を取りたくない。言語以上に、どうやってコミュニケーションしようとしているのか理解することが大事。(学生E)

以上のように、Deardoff (2006) および秋庭 (2012) を参考にしながら、本プログラムにおける学びについて、「態度」「知識」「スキル」の3つの側面から分析した。

## 5-2 友人関係の構築と深化による学びへの影響

本項では、友人関係の構築に関する外国人学生の回答を分析する。外国人学生はどのように友人関係を構築して深化させているのか、またそのような友人関係がプログラムでの学びにどの程度影響を与えているかを見る。

### 5-2-1 友人関係構築の背景

学生が友人関係に関する自分のパーソナリティをどのように捉えているのかを確認する。今回の調査の範囲では、ある程度だれとでも友達になれると答えた学生が2名(学生E, G)、内向的で友人をつくるのは時間がかかる、あるいはそれほど多くの友人は必要ないと答えた学生が5名(学生A, B, C, D, F)となっており、自ら働きかける学生が比較的少ないグループであることが確認できた。

一方で、そのようなパーソナリティをもつ外国人学生から見て、日本人学生は一見シャイではあるが積極的な学生が多かったという印象をもっていることがわかった。

・日本人学生はシャイで言葉に自信がないが、友達をつくりたいと思っている。(学生A)

・日本人学生は積極的にコミュニケーションを取ろうとする。ほとんどの場合、ことばの問題があっても解決できる。(学生B)

・日本人学生は、明るくてハッピーで外国人学生を支援したいと思っている。前向きで意欲が高い。ただシャイで自分からイニシアチブを取らないことが多い。(学生E)



### 5-2-2 友人関係の構築のきっかけ

次に、学生たちが実際に友人関係を構築していった経緯を見る。

外国人学生同士の友人関係に関しては、同じ宿舎で一緒に生活する中で自然と仲良くなったと回答した学生が過半数を超えており、何か特別なきっかけがあったとする学生は見られなかった。一方で、日本人学生とは具体的なきっかけがあったとして、プログラム冒頭のオープニングセレモニーやアイスブレイクで打ち解けたと話す学生（学生C, F）、授業が終わった後の食事やカラオケなどのインフォーマルな交流を挙げる学生（学生A, E）、東明学林での最後の宿泊研修で関係性が深まったと感じた学生（D, F, G）などの例が挙げられた。日本人学生は宿泊研修までは自宅から通学しており、基本的にはプログラム以外の時間で一緒に行動することはない。このため、プログラムの中で交流し合うことがきっかけとなり、さらにそれが継続されることでプログラム外のインフォーマルな交流につながったと考えられる。

友人関係の構築に関して、とくに Cross-cultural Workshop での活動を挙げる学生が5名と多かったことは注目に値する（学生B, D, E, F, G）。Cross-cultural Workshop では最初数回の授業で異文化間グループワークのトレーニングを行い、後半では特定テーマを決めてフィールドワークを含む本格的なグループワークを行う。さらに最後の宿泊研修ではグループ毎に最終プレゼンテーションの準備を進めリハーサルを行うなど、授業期間の全体を通じて長時間にわたり協働作業を行う。また宿泊研修では、グループのメンバー全員が同じ部屋に寝泊まりし、花火や鎌倉観光と一緒に体験するなど、お互いの関係性を深めるためのインフォーマルな機会を意図的に提供している。このようにプログラムの中で繰り返しグループワークを行うことで、お互いのパーソナルなストーリーをよく知ることができ、それにより友人関係が深まったと述べている学生がいる。

・このプログラムで友人ができたかという点、まだそこまでではないと思う。だが、Cross-cultural Workshop や浅草のプロジェクトと一緒に活動したことで、2人の日本人の学生と仲良くなった。今度は自分の母国で会う。今後もいい友人になれるのではないかと期待している。（学生B）

・Cross-cultural Workshop のアイスブレイクやその後のセッションで、いろいろな人とその人の人柄やストーリーを知ることができた。最後の東明学林の宿泊研修では部屋でいろいろな話をしたり一緒に食事したりして、さらに関係が強まった（学生F）

この他、「グループワークを通じて、お互いのストーリーを共有してみんな仲良くなった」（学生E）、あるいは「グループワークでいろいろ話のできたので仲良くなれた。とくに東明学林では、ずっと同じ時間を過ごしたことで関係が深まった」（学生G）とコメントする学生も見られた。

### 5-2-3 友人関係がもたらした学びへの影響

このような友人関係の構築が自らの学びにどの程度影響を与えたと学生自身が考えているのか、コメントのいくつかを確認する。

・日本人学生がいることで、日本についてよく理解できる。人は文化の鏡である。昭和の学生から多くの日本文化を学ぶことができる。（学生B）

・SSIP は、他の学生との交流を通じて日本文化や文化全般に関して多くの発見（insights）を与えてくれた。他のプログラムにはないアドバンテージだと思う。（学生E）

・友達とのよい関係を通じて、日本の文化、日本人のことがより理解できる。ウェブでわかることとは違う。  
このプログラムのよさの一つだと思う（学生F）

まず挙げられるのは、日本人学生との友人関係によって、日本文化や日本人についてより深く理解できたという感想である。「5-1-2「知識」に関する学びや気づき」で分析したように、「知識」に関しては、主に Japan Studies の講義やアクティビティを通じた専門的な学びと、授業以外で体験する日本人や日本社会の観察から得られる学びとがあった。これに加えて、SSIP2018 全体を通じて構築された日本人学生との交流の中で、学生たちはより深く日本の文化あるいは日本人について学んだと感じている。このことは、友人関係の深化が学びに影響を与えていることの一つの事例と考えられる。同時に、このような交流を通じて日本について学ぶことができること自体が、本プログラムの魅力と考えられているようである。また、友人関係を通じて得られた自信、積極性、柔軟性など、「態度」につながる学びがあったと述べる学生も見られた（学生E, G）。

・ Cross-cultural Workshop のグループの中で友情が生まれ、プレゼンテーションの成功につながった。  
それは重要なことだと思う。（学生G）

・ SSIP に限らないことだが、グローバルなネットワークをもつことはとても大事だと思う。今後も絶対にこの友人関係を続けたい。（学生E）

学生G は非英語ネイティブの学生であり、当初は英語でのコミュニケーションに不安を感じていたが、「Cross-cultural Workshop の活動を通じて他の学生たちとアイデアを出し合ってコメントし合う活動が楽しかった」とのコメントもあり、グループワークでの活動によって友人関係が深まり、その関係性をもとにプレゼンテーションを成功させたことで大きな自信を得た。これは、友人関係の深化によってさらに学びが深まるという好循環の事例といえる。

ただ一方では、Cross-cultural Workshop ではうまく友人関係が構築できず、疎外感を感じる学生も見られた（学生C）。学生C は自分のグループの選んだテーマ（ファッション）にあまり興味をもつことができず、時に日本語でディスカッションが進んでしまうことでややストレスがあったようであるが、Cross-cultural Workshop 以外の場面では外国人学生を中心に友人関係がつくれたとしている。多くの学生は友人関係の深まりが多様な学びにつながり、さらにプログラム全体の評価が高まったと答えている（学生B, C, D, E, F, G）。

・ SSIP は期待以上のものだった。日本文化を学ぶことが目的だったが、友人をつくれたのがよかった。  
（学生D）

## 6. 考察と今後の課題

### 6-1 考 察

以上のように、SSIP2018 を通じてどのような学びが得られたか、また参加者同士の友人関係が学びにどのように影響したか、という2つの観点から調査・分析を行ったが、その結果以下のことが明らかになった。

#### 6-1-1 SSIP2018 を通じて得られた学びの特徴

まず「態度」に関する学びについては、多くの学生が積極的な回答を示しており、「精力的になっ

た」「幸せな気持ちになれた」と率直な気持ちを語る学生や「日本語を勉強してまた日本に戻ってきたい」と、新たな意欲を示す学生もいた。その一方で自らの殻を破れず「大きな変化は感じていない」とする学生もいて、感じ方には個人差があった。

学びの成果については、例えば Mckeown (2009) のように、初めて海外研修に参加する学生のほうが、複数回目の参加学生よりも学習効果が高いとする研究もあり、本調査においても学生 D や学生 G に同様の傾向が見られた。一方で学生 E と学生 F のように海外経験が豊富な学生においても、自信をもって積極的に活動に取り組み、かつ冷静に自分自身を内省できる態度が見られる事例があった。この2名の学生の場合は、もともと海外経験を通じて高い異文化適応能力をもっていたと考えられ、本プログラムでの活動においてもその力が発揮されたか、もしくはさらに高まった可能性がある。これらの学生とは対照的に、学生 A は海外経験は多いものの、本プログラムを通じて「態度」の変容を実感することができなかった。この学生はその理由を自分がシャイだからできなかったと語っており、海外経験の有無よりもパーソナリティによる影響が現れた事例と考えることができる。

このように「態度」に関する学びについては、多くは積極的な回答が得られたが、一方で個人差があることもわかった。Deardoff (2006) のモデルに従えば、「態度」に関する学びは、その上に重なっていく「知識」「スキル」の習得の基礎となる学びであり、すべての参加者が一定以上の学びを得ることはプログラムの成否の観点から重要である。この点を、プログラム設計者は留意する必要があるだろう。

次に「知識」に関する学びでは、それぞれの授業単体に関する評価も見られたが、複数の授業を通じてそこに共通する日本文化や歴史が理解できたとする学生が見られた。これは本プログラムの狙いの一つでもあるが、学生はプログラム設計者の狙いを超えて、さまざまな事例を結び付けて多角的に学んでいることがわかった。これには授業からの学びだけでなく、自らの体験や日本人とのコミュニケーションなど、インフォーマルな場面での学びも含まれる。このように多面的に日本の文化や社会を学ぶことを興味深いと評価する学生もいれば、一つ一つの授業の内容にやや物足りなさを感じる学生もいるなど、同じ授業の中でも評価が分かれていることは、「態度」の学びと同様にプログラムの成否の観点から注意しておくべきである。

「スキル」に関しては、主に異文化間コミュニケーションスキルの観点から分析を行った。本プログラムでは、とくに Cross-cultural Workshop において、外国人学生と日本人学生との協働グループワークを行うため、必然的に他の学生とのコミュニケーションの機会が多い。そのような環境の中で、円滑にコミュニケーションできる学生、戸惑いながらも多様性を認めることのできる学生、ストレスを感じる学生などが見られた。

言語面では英語ネイティブ学生と非英語ネイティブ学生との間で感じ方に差があったことが確認できた。英語ネイティブの学生にとっては、日本人学生の英語はわかりにくいときもあったようだが、逆に非英語ネイティブの学生にとっては、日本人学生とのコミュニケーションにおいて言語的な問題はほとんどなく、学生 B のようにむしろ英語ネイティブの学生の方がときにわかりづらかったとしている。英語ネイティブの学生の場合は、学生 F のように簡単なことばへの言い換えや非言語的な方法を使ったコミュニケーションなどによって問題解決を図り、異文化コミュニケーションのスキルの向上が見られた学生もいる一方で、学生 C のように解決のスキルを持たずストレスを感じる学生も見られた。

また言語面以外では、学生 E のように日本人学生の一見消極的なコミュニケーションスタイルに当初戸惑いを感じながらも、自分のスタイルを押し通すのではなく日本人学生のスタイルを受け入れることで円滑なコミュニケーションにつなげる学生がいるなど、一定の学びが見られた。

以上のように、「態度」「知識」「スキル」の3つの領域における学びについてそれぞれ考察を加えたが、上述のようにこの3つの学びの関係は、まず「態度」に関する学びが基底となって、その上に「知識」「スキル」の学びが重なるという階層構造になっている。つまり「態度」に関する学びがあってその上層部である「知識」「スキル」の学びが成り立つというモデルである。

本調査においてもこのモデルに沿った学びの事例が見られた。学生 E と学生 F は、それぞれ「積極的な気持ちになった」、「世界が広がった」と、「態度」に関する学びを積極的に語っていたが、これらの学生は「知識」においても多角的な視点から日本の文化や歴史に対する学びを深め、また「スキル」においても柔軟な考え方で円滑なコミュニケーションができています。同様に学生 G も「今後は日本語を勉強して日本に戻ってきたい」という積極的な態度を示し、プレゼンテーションの成功や英語でのディスカッションでも自信がついたと語っており、それぞれの学びの関係性が見られた。これらの事例から、3週間の短い期間であっても、Deardoff (2006) のモデルが一定程度当てはまることが示されたといえる。

#### 6-1-2 友人関係の深まりによる学びへの影響

本調査では、日本人学生との友人関係を中心に分析を行ったが、まず特徴的なのは、一般に、日本人は英語力が低く外国人との交流に消極的という印象をもたれがちであるが、本プログラムではむしろ逆で、日本人学生は英語力には自信がないものの交流については外国人学生よりも積極的であると認識されている点である。この点については、一つには多くの学生が友人関係が深まったことのきっかけに挙げている、Cross-cultural Workshop によるグループワークの役割が大きいと考えられる。このグループワークはプログラム期間を通じて継続的に行われ、ディスカッションを通じてお互いの内面的なストーリーを共有することや、宿泊研修で一緒に食事をしたり部屋で過ごしたりするといったインフォーマルな体験を重ねる。最初は英語に自信がなくてシャイに見える日本人学生も、インタラクションが繰り返されることで、その積極性がだんだんと理解されていったと考えられる。

日本人学生が、一般的イメージと違って交流について積極的であると考えられるもう一つの理由としては、日本人学生の意識の中に、外国人学生を日本に来てくれた「ゲスト」とみなし、彼らが楽しめるようにもてなそうとする、いわば「ホスト」的な気持ちがあった可能性がある。この点についてははっきり言及する外国人学生はいなかったが、これを示唆するコメントはあった<sup>14</sup>。本調査ではこの点について明らかにすることはできなかったが、一つの可能性として指摘する。

このように、外国人学生は日本人学生とのインタラクションを繰り返すことで友人関係を構築し、友人関係の深まりによって、自信、積極性、柔軟性など、「態度」に関する学びが深まったと感じていることがわかった。例えば学生 F は、プログラムを通じて「相手の人柄やストーリー」を知って、最後の宿泊研修で「一緒に過ごして食事をしたりする」ことでさらに関係が強まったと回答しており、段階的に友人関係を深化させていったが、最後の感想としても「とてもいい環境だった。世界は素晴らしいと思った」と語っており、友人関係の深まりが「態度」に関する学びに作用していることを示している。これとは逆に、学生 A はもともと日本人の友人を作りたいと思い本プログラムに参加したが、積極的に友人関係の構築ができず、「それほど自分の中での変化は感じていない」と語って

いる。

一般に友人関係は、互いに相手のことを認め合うことで深まっていく。この点で、異文化環境での友人は、自国の文化を相対化して異なる文化を尊重する気持ちや固定観念や偏見をなくし平等意識を育むことにつながる。「態度」に関する学びの深まりが「知識」「スキル」の学びを支えるとするならば、異文化適応能力の獲得の基礎となる「態度」に関する学びに、友人関係の深化が影響していることは重要である。逆に考えると、プログラム設計上の観点からは、友人関係の深化を通じて「態度」に関する学びを深める仕掛けが有効であり、これによりプログラム全体の学びに対して大きなインパクトを与えることができると考えられる。本プログラムでは、Cross-cultural Workshopのように学生同士のインタラクションが多いスタイルの授業や、宿泊研修のようなインフォーマルな交流を多く取り入れているが、これは一つの事例であり、どのようなプログラムが友人関係の深化につながりやすいのか、友人関係を深化させるためのプロセスのモデル化などの実践的な取り組みについてさらなる研究が必要と考えられる。

「知識」に関する学びにおいても、日本人学生との友人関係を通じて日本文化や日本人について理解が深まったとする学生が多かった。「日本人学生は日本文化の鏡である（学生B）」「他の学生との交流を通じて日本文化や文化全般に関して多くの発見を与えてくれる（学生E）」などのコメントからは、外国人学生は日本人学生を通して日本に関する知識を深めていることがわかる。外国人学生は、授業以外の経験も含めさまざまな経験から多角的に学んでいることが明らかになり、日本人学生との交流が深まることでこれらの学びも深まっているといえる。一方で、学生Aは日本人学生と友達になりたいという気持ちはあったがあまり関係が深まらず、他の学生に比べると「知識」に関する学びは限定的だったようである。この事例は、学びの深化が友人関係によって影響を受けることを逆説的に示していると考えられる。

以上の考察により、友人関係の深まりは、「態度」「知識」に関する学びに強く関係性が見られたことがわかったが、一方で「スキル」に関する学びについては、本調査の範囲では明確な関係性は確認できなかった。しかしながら、外国人学生は日本人学生との友人関係を通じて多くの学びを得ており、とりわけ「態度」の学びへの影響は重要である。このことから、外国人学生にとって日本人学生はいわば「触媒」の役割を担っており、外国人学生たちはこの「触媒」を通じてさまざまな学びを深めていったといえる。とくに友人関係の深化において、Cross-cultural Workshopのもつ継続的な交流活動が効果的だったと考えることができる。友人関係の構築にあまり積極的でない学生であっても、継続的に行われる活動の中でお互いの内面的なストーリーを共有することで人間性を理解し、インフォーマルな交流も含め、多様な交流に広がっていったようである。これはおそらく日本人学生にも見られる傾向であると思われるが、この分析については次稿にゆずる。

## 6-2 今後の課題

以上のように、SSIP2018における外国人学生の学びおよび友人関係の構築とその学びへの影響について考察を加えた。しかしながら、本調査では分析できなかった課題もあり、最後にそれを整理する。

一点目の課題は、さらなる事例の調査についてである。本調査は一つの事例の報告に過ぎず、短期海外研修における異文化適応能力の獲得についてより一般的な知見を得るためには、少数サンプルによる質的調査だけでなく、量的研究を行う必要がある。その際、より厳密な調査を行うためには例

えば人間関係を表す言葉（「友達」や「friendship」など）の意味を明確にすること、回答者の文化的背景の違いについて考慮すること、本プログラム関係者以外を対象とする調査を行うことなど、さらに慎重に調査・分析方法を検討すべき点があると考えられる。

二点目として、より一般的な知見が得られた場合に、その知見をプログラムにどのように活かすかといった実践的な課題がある。本調査では、本プログラムにおける学びに関して友人関係の深化が影響していることが示唆されたが、友人関係の構築が個人のパーソナリティや経験によって異なることを考えれば、参加者が一定以上の学びを得るためにも、参加者同士の関係性が円滑になるような働きかけが必要であろう。これらの要素を組み合わせながら、プログラム全体を通じて効果的な学びが得られるようにプログラムを設計すること、また実際に上手に友人関係が築けない学生に対しての学びの質を向上させるためのサポートを用意することが求められる。

三点目の課題として、本調査で示された友人関係の学びへの影響についてさらに理解を深めるため、視点を変えた検証が必要と考えられる。検証すべき点の一例として、友人関係の持続性とプログラム終了後の学びへの影響が挙げられる。本プログラムでの友人関係は、3週間の比較的短期の間に生まれたものであるが、学生の多くは本プログラムが終了してからも友人関係を維持したいと考えており、LINE や Facebook などの SNS を通じて実際に帰国後も関係性を保っているようである。今後この関係性を継続調査することで、本プログラムでの経験がその後どのように影響しているか分析することができる。また別の観点として、本プログラムで示された「ホスト」と「ゲスト」の意識についてもさらなる調査が必要である。国や文化の違いがあってもこのような意識が生まれるものなのか、あるいは日本人学生に特徴的な傾向なのか明らかにすることで、友人関係と学びへの影響について多面的な理解が深められると考える。

以上、本稿では SSIP2018 に参加した外国人学生を対象とする調査結果を報告した。今後、同じプログラムに参加した日本人学生を対象とする調査について、分析・報告したいと考えている。

## 注

1 本稿における「外国人学生」「日本人学生」とは、とくに国籍による違いを意味するものではなく、「外国人学生」は本プログラムに参加する海外の協定大学等の学生を、「日本人学生」は昭和女子大学の正規課程に在籍する学生（ただし留学生を除く）を意味するものとする。

2 「グローバル人材育成推進事業」は 2012 年度から 2016 年度まで実施された文部科学省の事業であり、若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図るべく、大学教育のグローバル化を目的とした体制整備を推進する事業に対して重点的に財政支援することを目的としている。2014 年度からスーパーグローバル大学等事業に組み込まれ、名称も「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に変更された。本学は同事業のタイプ B（特色型）に採択された。<https://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/> 参照。

3 「東明学林」とは、本学の学外研修施設の一つであり、神奈川県足柄上郡大井町にある。本プログラムの宿泊研修はこの東明学林で行われている。

4 詳しくは池田（2014）、McKeown（2009）に多くの研究が紹介されている。近年では、非アカデミックな能力の修得を測定するテストとして IDI、GPI が開発されるなど、学びの可視化に向けた研究が進められている。

5 例えば足立（2010）、池田（2014）を参照。

6 例えば Paige et al.（2009）、Chieffo & Griffiths（2004）、McKeown（2009）など。

7 日本においては、日本学生支援機構（2018）を参照。これによれば、2016 年度の 3 か月未満の短期プログラ

ムの参加人数は、協定等に基づく留学と協定等に基づかない留学の合計で 69,214 人となっている。これは 5 年前である 2011 年度 (35,629 人) と比較すると 94.3% の増加率である。また米国においては、Institute of International Education, Open doors (2017) を参照。これによれば、2015-16 年の 8 週間以内の短期プログラムの参加者は 171,779 人と全体の約 52.8% を占めており、2011-12 年 (145,916 人) に対して 17.7% の増加率である。

8 本調査で用いた半構造化インタビューの質問項目は以下の通りである。

- 「なぜ SSIP に参加しようと思ったのか」
- 「日本に来たことでどんな (新しい) 経験をしたか」
- 「SSIP に参加して、自分の中でどんな変化があったか」
- 「態度や考え方についての変化はあったか」
- 「知識や洞察の深まりについて変化はあったか」
- 「SSIP を通じて、他の参加者と仲良くなったか」
- 「何がきっかけで仲良くなったのか」
- 「メンバーと協力的に活動できたと思うか」
- 「メンバーで活動するうえで、大変だったこと・ストレスを感じたことがあるか」
- 「留学生同士と日本人学生とのコミュニケーションの取り方で何か違いはあるか」
- 「同じグループの留学生と日本人学生とで、親しさの度合いに違いはあるか」

9 佐藤 (2008) p.62 を参照。

10 コード化によってカテゴリー分類した結果は以下の通りである。

- 「参加にあたっての期待・不安」
- 「目的の達成および理由」
- 「プログラムで学んだこと」
- 「学びのきっかけ」
- 「日本人学生とのコミュニケーションに関する学び」
- 「考え方の枠組みに関する学び」
- 「友人関係の学びへの影響」
- 「友人関係に関する自分のパーソナリティ」
- 「日本人学生との友人関係および親密になるきっかけ・体験」
- 「外国人学生との友人関係および親密になるきっかけ・体験」
- 「日本人学生に対する印象・評価」
- 「コミュニケーションの問題・違和感とその克服もしくは受容」
- 「コミュニケーションを通じた内省と自分の中の変化」
- 「プログラムの評価」
- 「帰国後の影響」
- 「友人関係によるプログラムの評価への影響」

11 図 1 の通り、Deardoff (2006) は異文化適応能力に関わる知識を多面的に捉えているが、本調査においては日本文化という「固有文化に関する知識」についてのみ分析した。

12 本学は 1988 年に、米国マサチューセッツ州ボストンに「昭和ボストン (Showa Boston Institute for Language and Culture)」を設立した。「フレンドシップ」とはこの昭和ボストンで行われるプログラムの一つで、昭和ボストン滞在中の日本人学生を現地大学に通う外国人学生がバディとなってサポートするプログラムである。正式名称は「昭和フレンドシッププログラム」。

13 学生 C は、参加目的として「海外で新しい発見をしたい。違う世界を見てみたい」と語っており、特別日本についての言及はなかった。

14 学生 C はオープニングセレモニーで仲良くなった日本人学生 2 名との友人関係がその後深まらなかったこ

とを踏まえ、「(日本人学生の友好的な態度が) 義務的なかどうか少し気になった」と語っている。この背後には、この日本人学生たちは自分をもてなそうとしてくれたのであって、本当に友達になりたかったわけではないのではないかという学生Cの疑念があった可能性がある。

## 参考文献

- 秋庭裕子 (2012) 「「国境をまたぐ能力」の育成を目的とした短期海外研修の学習成果：オーストラリア研修の事例より」『一橋大学国際教育センター紀要』(3), 一橋大学国際教育センター, pp.15-28
- 足立恭則 (2010) 「大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ」『人文・社会科学論集』28, 東洋英和女学院大学, pp.77-91
- 池田伸子 (2014) 「効果的な「海外留学研修」プログラムの開発に関する一考察」『ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要』第6号, 立教大学, pp.17-30
- 工藤和宏 (2011) 「短期海外研修プログラムの教育的効果とは—再考と提言—」『ウェブマガジン「留学交流」』2011年12月号 Vol.9  
[https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/\\_icsFiles/afldfile/2015/11/19/kazuhirokudo.pdf](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/_icsFiles/afldfile/2015/11/19/kazuhirokudo.pdf)
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法：原理・方法・実践』, 新曜社
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2018) 平成28年度協定等に基づく日本人学生留学状況及び協定等に基づかない日本人学生留学状況(在籍大学等把握分)の合計  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/2017/ref17\\_02.html](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2017/ref17_02.html)
- Chieffo, L. & Griffiths, L. (2004) Large-Scale Assessment of Student Attitudes after Short-Term Study Abroad Program. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, Vol. 10, pp.165-177.
- Deardoff, D. (2006) Identification and Assessment of Intercultural Competence as a Student Outcome of Internationalization. *Journal of Studies in International Education*, Vol. 10, No. 3, pp.241-266.
- Donnelly-Smith, L. (2009) Global Learning through Short-Term Study Abroad. *Peer Review*, Fall 2009, Vol. 11, No.4.  
<https://www.aacu.org/peerreview/2009/fall/donnelly-smith>
- IES Abroad (2011) The IES Abroad Map for Study Abroad Programs (Fifth Edition).  
<https://www.iesabroad.org/system/files/IESAbroadMap2011.pdf>
- Institute of International Education, Open Doors (2017) U.S. Study Abroad. Washington, DC: Institute of International Education.  
<https://www.iie.org/Research-and-Insights/Open-Doors/Data/US-Study-Abroad/Duration-of-Study-Abroad>
- Mckeown, J. (2009) *The First Time Effect: The Impact of Study Abroad on College Student Intercultural Development*, State University of New York Press, Albany.
- Paige, M., Fry, G. Stallman E., Josić J. & Jon Jae-Eun. (2009) Study Abroad for Global Engagement: The Long-term Impact of Mobility Experiences, *Intercultural Education*, Vol. 20, s1, pp.S29-S44.

\* web サイトの最終アクセス日はすべて7月25日。

(にしかわ すみ 日本語日本文学科)

(やまざき まさのぶ 国際交流課)